
ドナーの術前心理を知るために ～アンケート調査を実施して～

岩崎志野、小玉光子、大門裕実、熊谷ナミ子
秋田大学医学部附属病院 2階西病棟

Preoperative mental state of living donor : a questionnaire survey

Shino Iwasaki, Mitsuko Kodama, Yumi Daimon, Namiko Kumagai

2-West Ward, Akita University Hospital

<はじめに>

当科では、1998年2月から1999年9月までの間に、14例の生体腎移植を経験した。

振り返ると、レシピエントに医療者の関心が集中する傾向にあり、ドナーは、健康であるという名目のもとに、医療者の関心や看護ケアの谷間におかれていたのではないかと考えさせられた。荻野雅等¹⁾が行った調査では「腎移植医療現場では、看護婦はレシピエントに同一化する傾向にあり、ドナーに対する関わりの回避が注目をひく現象といえる」と述べている。

そこで、今回私たちは、今後の看護活動に役立てることを目的に、術前のドナーに注目し、その不安心理を調査したので報告する。

<I. 研究方法>

対 象：1998年2月から1999年9月までの、生体腎移植ドナー14例

方 法：退院後の郵送による筆記アンケート

<II. 結果と考察>

14例のドナーの背景は、40歳代、50歳代が各々4例ずつと最も多かった。レシピエントとの関係では、父親、母親がそれぞれ5例ずつであり、親子間移植が10組あった。

アンケートの回収率は93%であった。腎臓を提供することへの不安に対して「不安があった」と答えたものは11例であり、その内容は、複数回答の中から「提供した腎臓がうまく働いてくれるか不安」という回答が10例であった。

ドナーは、自分が提供した腎臓が生着するかどうかに強い不安を持っていることがわかった。春木繁一氏は「ドナーの持つ不安は、実際はレシピエントより大きい」と述べている。ドナーの不安は、レシピエントや家族の目に見えない期待を背負う、他の手術ではみられない特有の不安であると言える。

<父親と母親の不安の違い>

ドナーが父親の場合と母親の場合が、ともに5例ずつあった。しかし不安の内容にはやや変化

があった。父親の場合は、「提供した腎臓がうまく働いてくれるか不安」の他に、「自分の腎臓が1個になってしまう不安」や「手術後、自分の健康が取り戻せるか不安」をあげていた。これは、これからも家族を支えていかなければいけない父親の役割が反映されていると考えられる。

それに対して母親の場合は、複数回答にもかかわらず5例全員が「提供した腎臓がうまく働いてくれるか不安」ただひとつだけの回答であった。一般的に母親は、自分がこんな子を産んでしまったという罪責感から、その償いのためにドナーになることが多いと言われている。私たちのアンケートでもやはり同様の結果であったのではないかと考える。

<不安が解消されたとき>

不安は、手術前の説明などですでに3名が「解消された」と回答している。今後も、不安解消のために、理解しやすい説明や雰囲気作りなどを継続していく必要がある。

また、手術後、レシピエントの経過が良好と知ったときに不安が解消されたと4人が回答している。術後のレシピエントの状態を知ることが、安心感につながっていると考えられた。これに対して私たちは、これまでと同様、レシピエントの状態を考慮し、感染防止に努めながら、早期の面会を設定していきたいと考える。

レシピエントがまだ入院中や通院中であることから、アンケートに回答したドナーは医療者に気を使っているのではないかという感じも否めない。そんな中「不安は今だに解消しない」と答えたドナーが1例あった。その内容は「手術後、レシピエントが数回の拒絶反応に悩み、今なお、わずかの体調の変化にも、拒絶反応の前兆ではないかと感じ、そのことでドナー自身の不安も解消されない」ということであった。この思いは、アンケート用紙に記載こそされなかったが、ドナー全員の心の奥に、共通して存在する不安ではないかと考えられ、貴重な意見と言える。

手術前の説明では「説明不足を感じなかった」が10例であったのに対し、「不足を感じた」も3例あった。少数意見ではあるが、この3例の内容は、複数回答の中から「手術までの日程」「手術前の検査」「手術後の生活」などであった。これに対しては14例のドナーを経験して、一連のプロセスも見えてきたことから、クリティカル・パスの導入が効果的ではないかと考えている。

<経験者から今後のドナーへのアドバイス>

今後ドナーとして入院されてくる方へ、経験者としては「不安の解消」や「医療スタッフや自分を信じる」などをアドバイスする意見が多かった。これは、術前後にわたってさまざまな感情がずっとついてまわるドナーの本心ではないかと考えられる。

患者は、ふと湧いた疑問や不安を、そのつど医師に説明を求めるよりも、身近にいる看護婦に問いかけてくる場合が多い。言い換えれば看護婦は、ドナーの抱えている不安を早い時期に察知することができる。これらの情報を医師やチームの看護婦に伝達し、ともに討議して、患者個々の事情に即した対策を講じていく必要がある。

<腎提供後の感想>

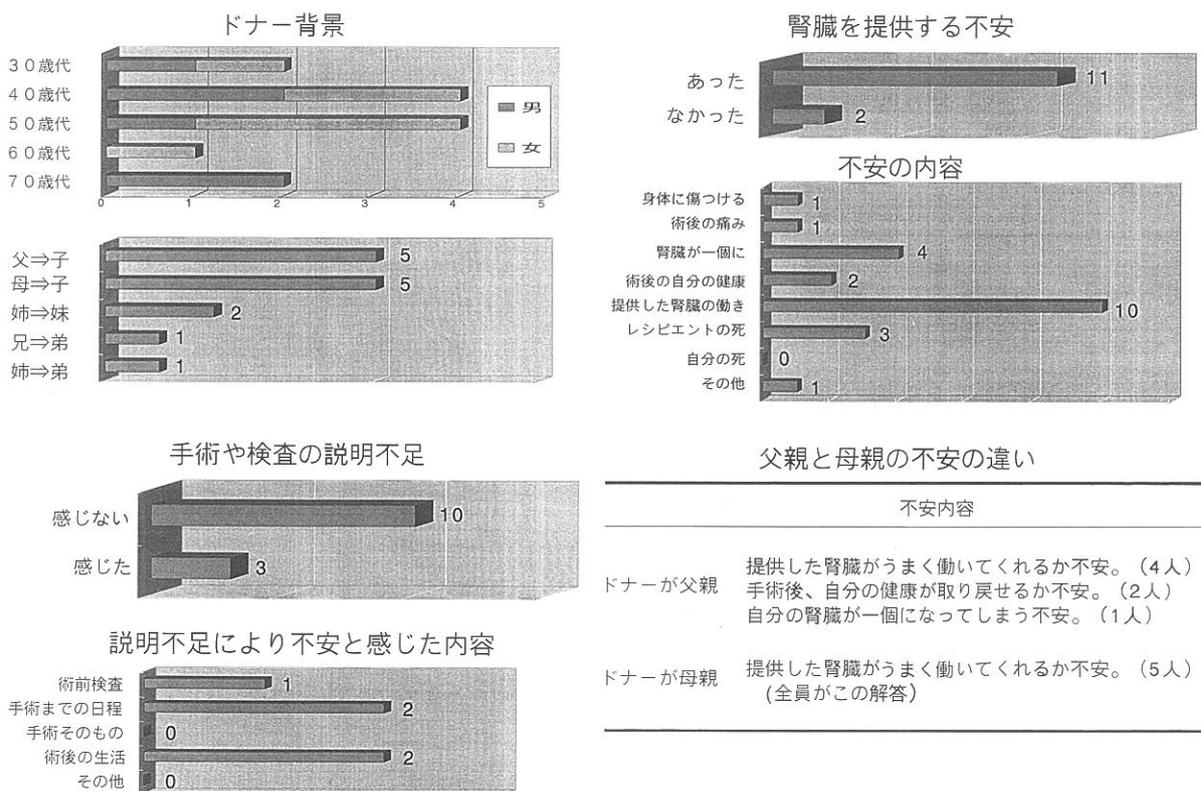
ドナーは、健康な人間に手術という侵襲を加えられている。しかし、自分自身の身体脆弱感よ

りも、「透析で苦しむレシピエントを見なくてよくなり、自分も精神的に楽になった」「透析の地獄のような日々と比べると、今は奇跡のようだ、この幸せが続いてほしい」などと、移植したことによってドナー自身も精神的に楽になったという意識が出ていた。

また、「医療者の声かけに不安が和らいだ」と回答された例もあった。これからも、基本的なことではあるが、共感的な態度や誠実な態度で接し、信頼関係を作りながら、ドナーの心理面をサポートしていけるように努力していきたいと考える。

<Ⅲ. 結 語>

1. ドナーは「提供した腎臓がうまく働いてくれるか」という不安を強く持っており、特に母親がドナーの場合は、その一点に不安が集中した。
2. 手術や検査の説明不足に対しては、クリティカル・パスの導入を考えている。
3. ドナーが抱えている不安を率直に表現できるような雰囲気づくりなど、より積極的にドナーに関わっていく必要がある。



引用文献

- 1) 荻野 雅他：腎移植医療における看護婦の倫理的葛藤について、腎と透析 Vol.34 No. 4、1993

参考文献

- 1) 春木繁一他：腎移植、がん医療における患者の精神問題、月刊ナーシング Vol.18 No. 2、1998
- 2) 成田義弘：腎移植をめぐる患者心理と家族内力動

-
- 3) 清水順三郎他：患者への精神医学的アプローチ・こころとからだの看護をめざして、医学書院、1982
 - 4) 和田 攻：ナースのための患者とその家族の指導ガイド、文光堂、1996
 - 5) 長谷川 浩他：人間対人間の看護、医学書院、1974